

Instantons とその複素領域に於ける poles.

京大 数理解析 村瀬 元彦

§. 1.

(Anti-)self-dual Yang-Mills 方程式の 1-instanton solution はこれまで知られてゐる解ですべて尽くされることか様々な方法で証明されている。ここでは [4] に述べられた定理を用いてそれを示してみよう

Anti-self-dual Yang-Mills 方程式とは, $su(2)$ -値 vector potential A_μ ($\mu=0,1,2,3$) に対する方程式

$$(1) \quad F_{\mu\nu} \stackrel{\text{def}}{=} \partial_\mu A_\nu - \partial_\nu A_\mu + [A_\mu, A_\nu] \quad , \quad \partial_\mu = \frac{\partial}{\partial x_\mu}$$

$$(2) \quad \frac{1}{2} \epsilon_{\mu\nu\alpha\beta} F_{\alpha\beta} = -F_{\mu\nu}$$

のこゝである。 \mathbb{R}^4 の座標 x_0, x_1, x_2, x_3 を固定して,

$$A = \sum_{\mu=0}^3 A_\mu dx_\mu, \quad F = \sum_{\mu<\nu} F_{\mu\nu} dx_\mu \wedge dx_\nu$$

と書けば, これは

$$(1) \quad F = dA + \frac{1}{2} [A, A]$$

$$(2) \quad *F = -F \quad (* \text{ は Hodge star operator})$$

とも表わされる。 x_0 を x_4 と書き直し, 向まもこめて x_1, x_2, x_3, x_4 を座標にとれば, (1), (2) の解 A は self-dual 方程式 $F = *F$ の解にたるので, 以下では座標を fix し anti-self-dual 方程式のみを扱う。

物理学者達がこの方程式を解くときに用いた手法は次の通りである。 [5]

$$\bar{\sigma}_{12} = \bar{\sigma}_{03} = \frac{1}{2} \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{bmatrix}, \quad \bar{\sigma}_{13} = -\bar{\sigma}_{02} = -\frac{1}{2} \begin{bmatrix} 0 & -i \\ i & 0 \end{bmatrix}$$

$$\bar{\sigma}_{23} = \bar{\sigma}_{01} = \frac{1}{2} \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{bmatrix}$$

を用いて

$$\bar{\sigma} \stackrel{\text{def}}{=} -i \sum_{\mu < \nu} \bar{\sigma}_{\mu\nu} dx_\mu \wedge dx_\nu$$

を作る。 $\bar{\sigma}$ は constant $su(2)$ -valued self-dual 2-form である。今, 実数値 1-form $a = \sum_{\mu=0}^3 a_\mu dx_\mu$ によって

$$(3) \quad A = *(a \wedge \bar{\sigma})$$

と表わされる様な A を考えよう。このとき, 先の (1), (2) と次の (4), (5) とは同値である:

$$(4) \quad *da = -da$$

$$(5) \quad d*a + a \wedge *a = 0.$$

(Self-dual solution かほしければ, $\bar{\sigma}$ の定義を anti-self-dual にたす様にかえれば $\bar{\sigma}$ 同様に a によって (3) で作った A がちゃんと self-dual になる。つまりどこの方程式も a のレベルでは anti-self-duality にたおる訳である。)

$\rho \in$ 実数値函数とする. $\theta \in \mathcal{L}$ $a = d \log \rho$ と書かれる存し,

(4) は自動的に満たされ, (5) は次の様に存す:

$$\begin{aligned} & d * d \log \rho + d \log \rho \wedge * d \log \rho \\ &= \frac{1}{\rho} d * d \rho - \frac{1}{\rho^2} d \rho \wedge * d \rho + \frac{1}{\rho^2} d \rho \wedge * d \rho \\ &= \frac{1}{\rho} d * d \rho \\ &= -\frac{1}{\rho} * (\Delta \rho). \quad \Delta \text{ はラプラシアン.} \end{aligned}$$

従って (5) は $\frac{1}{\rho} \Delta \rho = 0$ と同値.

1-instanton solution を得るには

$$\begin{aligned} (6) \quad \rho &= 1 + \lambda^2 / \sum_{\mu=0}^3 (x_\mu - y_\mu)^2 \\ \lambda &\in \mathbb{R}, \quad \lambda > 0, \quad y = (y_0, \dots, y_3) \in \mathbb{R}^4 \end{aligned}$$

とすればよい.

$$(\partial_\mu)^2 \rho = -2\lambda^2 / (\sum_\nu (x_\nu - y_\nu)^2)^2 + 8\lambda^2 (x_\mu - y_\mu)^2 / (\sum_\nu (x_\nu - y_\nu)^2)^3$$

ゆえに $\Delta \rho = 0$ と存す.

定理. 1-instanton solution は (6) の形の ρ を用いて

$$(7) \quad A = * (d \log \rho \wedge \bar{\sigma})$$

と表わされるものに限る.

証明. [4] によれば, instanton solution はその複素領域に於ける poles の場所だけによって unique に定まる. 但し: ここで扱う singularity は gauge 変換で消すことの出来ないも

のみである。

そこで、まづ領域を複素化しよう。(1), (2) は conformal invariant なので方程式は $S^4 \supset \mathbb{R}^4$ で定義すればいいと
 (2) より、但し $S^4 = \{ t = (t_1, \dots, t_5) \in \mathbb{R}^5 \mid t_1^2 + \dots + t_5^2 = 1 \}$.

このとき、

$$Gr \stackrel{\text{def}}{=} \left\{ z = (z_0 : \dots : z_5) \in \mathbb{P}_{\mathbb{C}}^5 \mid z_0^2 = z_1^2 + \dots + z_5^2 \right\}$$

と定めれば、 Gr は S^4 の自然な複素化と見做せるであろう。

$$\begin{array}{ccccccc} \mathbb{R}^4 & \hookrightarrow & S^4 & \hookrightarrow & Gr & \hookrightarrow & \mathbb{P}_{\mathbb{C}}^5 \\ (x_0, x_1, x_2, x_3) & & & & & & (z_0 : z_1 : \dots : z_5) \end{array}$$

による \mathbb{R}^4 の $\mathbb{P}_{\mathbb{C}}^5$ のうめこみは、

$$(8) \quad \begin{aligned} x_0 &= z_4 / (z_0 + z_1), & x_1 &= z_5 / (z_0 + z_1) \\ x_2 &= z_2 / (z_0 + z_1), & x_3 &= z_3 / (z_0 + z_1) \end{aligned}$$

によ、2手之られる。

±で、(7) の pole で gauge 変換で消せられるものは、方程式
 $p = 0$ で定義される Gr の divisor であり、これが判るから、
 それを $\mathbb{P}_{\mathbb{C}}^5$ の divisor と Gr との intersection とし表すしよ
 う。その $\mathbb{P}_{\mathbb{C}}^5$ の divisor の定義方程式は

$$(9) \quad \begin{aligned} (y^2 + \lambda^2 + 1) z_0 + (y^2 + \lambda^2 - 1) z_1 \\ - 2y_2 z_2 - 2y_3 z_3 - 2y_4 z_4 - 2y_5 z_5 = 0 \\ y^2 = \sum_{\mu=0}^5 y_{\mu}^2 \end{aligned}$$

である。

(この様に, 1-instanton には degree 1 の divisor が対応する. 一般に, k -instanton には degree k の reduced divisor が対応する. 但し $\text{Pic}(Gr) \cong \mathbb{Z}$ に注意.)

すなわち, $\sum_{l=0}^5 c_l z_l = 0$ なる hyperplane $H \subset \mathbb{P}_{\mathbb{C}}^5$ による section が instanton の pole であるとするとき,

$$\textcircled{1} \quad c_l \in \mathbb{R} \quad l=0, \dots, 5.$$

$$\textcircled{2} \quad H \cap S^4 = \emptyset$$

が成り立つ. ([4].) この条件を少し書きかえてみよう.

二次形式 $z_0^2 - z_1^2 - z_2^2 - z_3^2 - z_4^2 - z_5^2$ による同型

$$\mathbb{P}_{\mathbb{C}}^5 \cong (\mathbb{P}_{\mathbb{C}}^5)^*$$

を定めれば, hyperplane は次のように

に点に対応する;

$$H = \{ z \in \mathbb{P}_{\mathbb{C}}^5 \mid \sum c_l z_l = 0 \} \longleftrightarrow (c_0; c_1; -c_2; -c_3; -c_4; -c_5) \in \mathbb{P}_{\mathbb{C}}^5.$$

$\mathbb{P}_{\mathbb{C}}^5$ の同次座標 $(z_0; \dots; z_5)$ に関する complex conjugation による fixed point set を $\mathbb{P}_{\mathbb{R}}^5$ で表わせば, $S^4 = \text{Int} \mathbb{P}_{\mathbb{R}}^5$.

したがって, 条件 $\textcircled{1}, \textcircled{2}$ は

$$\textcircled{1}' \quad c = (c_0; -c_1; \dots; -c_5) \in \mathbb{P}_{\mathbb{R}}^5$$

$$\textcircled{2}' \quad c_1^2 + c_2^2 + c_3^2 + c_4^2 + c_5^2 < c_0^2$$

と同値である: 何か計算によるべし. これは \mathbb{R}^5 の単位球面の内側を表わしている.

一方, (9) なる hyperplane に対応する点

$$(y^2 + \lambda^2 + 1; -y^2 - \lambda^2 + 1; 2y_2; 2y_3; 2y_0; 2y_1)$$

によつて ①', ③' を満たす \mathbb{R}^5 の \mathbb{C} 加群 \mathbb{C} としておくれから、
これより、 \mathbb{R}^5 の 1-instanton solution が (7) によつて得られることが判る。□

§.2.

A は、底空間 \mathbb{R}^4 , fibre $\in SU(2)$ によつて \mathbb{C}^∞ -principal bundle P の connection としても解釈出来る。このとき F は curvature であり、gauge 変換とは bundle automorphism による connection form の引きまわしを指している。

P に associate した rank 2 - vector bundle を E で表わす。
 $E = P \times_{SU(2)} \mathbb{C}^2$ [4] に示した様に E は \mathbb{R}^4 から Gr_2 に「解析接続」出来る。その証明には Atiyah-Ward [1] によつて作られた \mathbb{R}^3 上の algebraic vector bundle を full に用いたのだから、実はそのことは本質的ではない。実際、M. Maruyama [2] による elementary transform を用いて、 E から直接に $Gr_2 \setminus \{1\text{点}\}$ 上の「解析接続された」^{alg.} vector bundle を構成出来る場合がある。しかし [4] でこの構成法を用いたのは、むしろには次の問題が解決されたことによる；

問題. $S^4 = \{t \in \mathbb{R}^5 \mid t_1^2 + \dots + t_5^2 = 1\}$ によつて

実4次元球面 S^4 に自然な real algebraic structure を入れるとき, 底空間 E S^4 , fibre $F \subset \mathbb{C}^n$ とする real algebraic bundles E, F が real analytic に同型ならば, real algebraic に同型か?

これは次の様に言いかえてもよい.

問題. S^4 上の real algebraic vector bundle で同じ Second Chern class を持つものは unique か?

±2, Instanton A に対応して定まる $\mathbb{P}_{\mathbb{C}}^3$ 上の algebraic vector bundle of rank 2 $E(A)$ を表わすとき, $E(A)|_l \neq$ 自明 とする様な projective line $l \subset \mathbb{P}_{\mathbb{C}}^3$ $E(A)$ の jumping line と呼ぶ.

§1 で定義した Gr は実は $\mathbb{P}_{\mathbb{C}}^3$ の lines を分類するグラマン多様体であり, したがって A の jumping line l は $Gr = Gr(1,3)$ の subset を為す. それを $J(A)$ と書くと, $J(A)$ は $Gr(1,3)$ の divisor であり, E は $Gr \setminus J(A)$ 上の (affine)-algebraic vector bundle \widehat{E}_A に解析接続出来る, それにとり, A も \widehat{E}_A の (1,0)-型解析的接続に解析接続出来るのであった. このとき, \widehat{A} は $J(A)$ には \widehat{A} 解析接続出来るな

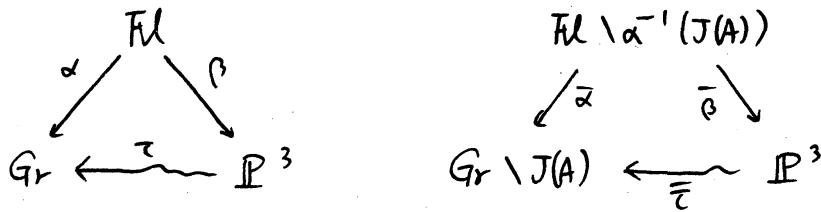
11. ことか言えり;

$Fl = Fl(0, 1, 3) \hookrightarrow Gr(1, 3) \times \mathbb{P}^3$ は flag 多様体,

$\alpha: Fl \rightarrow Gr, \beta: Fl \rightarrow \mathbb{P}^3$ は natural projection である.

また $\bar{\alpha} = \alpha|_{Fl \setminus \alpha^{-1}(J(A))}, \bar{\beta} = \beta|_{Fl \setminus \alpha^{-1}(J(A))}$

とおく. $\tau = \alpha \circ \beta^{-1}, \bar{\tau} = \bar{\alpha} \circ \bar{\beta}^{-1}$ は flag と graph による algebraic correspondence である.



[3] の命題 3 は, $\forall \zeta \in \mathbb{P}^3$ に対し,

$\tilde{A}|_{\bar{\tau}(\zeta)}$ が $\tilde{E}_A|_{\bar{\tau}(\zeta)}$ の flat connection である

ことを主張している. したがって, $\tilde{A}|_{\bar{\tau}(\zeta)}$ が, $J(A) \cap \bar{\tau}(\zeta)$ の

ある component X 上で拡張されたことと, $\tilde{E}_A|_{\bar{\tau}(\zeta)}$ の flat

section は X 上に flat に拡張される. $\tilde{E}_A = \alpha_* \beta^* E(A)|_{Gr \setminus J(A)}$

により \tilde{E}_A を作ることを思い出す ([4]), X に対応

する \mathbb{P}^3 の line は jumping line ではない. これは矛盾.

\tilde{E}_A を $\bar{\alpha}$ で持ち上げた bundle $\bar{\alpha}^* \tilde{E}_A$ は, 自然に

$\beta^* E(A)|_{Fl \setminus \alpha^{-1}(J(A))}$ と同型である. 従って $\bar{\alpha}^* \tilde{A}$ は

$\beta^* E(A)$ の connection である. $\bar{\alpha}^* \tilde{A}$ は singularity を有している.

しかし $\forall \zeta \in \mathbb{P}^3$ に対し $\bar{\alpha}^* \tilde{A}|_{\bar{\beta}^{-1}(\zeta)}$ が flat である.

ることに変わりはない。ところで $\beta^*E(A)|_{\beta^{-1}(\zeta)}$ は trivial bundle だが、 $\beta^{-1}(\zeta) \cong \tau(\zeta) \cong \mathbb{P}^2$ 上の方程式

$$dY + (\alpha^* \hat{A}|_{\beta^{-1}(\zeta)}) \cdot Y = 0$$

$\Leftrightarrow dY + (\hat{A}|_{\tau(\zeta)}) \cdot Y = 0$ は integrable で、monodromy を持たない線型微分方程式である。

従って、 $\tau(\zeta) \subset Gr$ が $\zeta \in \mathbb{P}^3$ に holomorphic によることを考えれば、 (\hat{E}_A, \hat{A}) は、integrable な線型微分方程式

$$(10) \quad dY + B(\zeta) \cdot Y = 0, \\ B(\zeta) = \hat{A}|_{\tau(\zeta)},$$

の monodromy preserving deformation と考えられる。しかし total space Gr 上で \hat{A} は flat にはならないことに注意。 $\tau(\zeta)$ に制限したときだけ flat (integrable) なのである。また、monodromy も $\tau(\zeta)$ に制限したときだけ出て来るという事である。

$E(A)$ の ζ に於ける fibre は、方程式 (10) の解空間と自然に同一視出来る。

$B(\zeta) = \hat{A}|_{\tau(\zeta)}$ は $\tau(\zeta) \cap J(A)$ の generic point ではない simple pole にはならない。これは、 $\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1$ の変形 $\mathbb{P}(\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1} \oplus \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(l))$, $l \equiv 0 \pmod{2}$ (ここは、

vector bundle $E \rightarrow \mathbb{P}^1$ に対し各 fibre を projectify (2 作
った \mathbb{P}^{n-1} -bundle を $\mathbb{P}(E)$ で表わす,) を general に
変形して $\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1$ に持ってゆくとき, 必ず途中で

$\mathbb{P}(\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1} \oplus \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(2))$ を経過する, ということと, この
 $\mathbb{P}(\mathcal{O}_{\mathbb{P}^1} \oplus \mathcal{O}_{\mathbb{P}^1}(2))$ の universal family が 1 次元であ
るということとに対応して 11。

こう 11 た complex manifold の ^{変形} 関係に 7 11 ては, 「線
型微分方程式の超局所解析, 1979 年 1 月」の報告集で詳しく
論ずることにする。

$Gr(1,3)$ のどんな divisor が instanton の pole にたり得
るのか, は残念ながらよく判らな 11。1-instanton の時には
容易に計算も, 一般にたるとたんに面倒になり, 今の
ところより 必要条件が求められな 11 ている。次数 k の divisor
全体の次元が見れば, k -instanton の次元は $8k-3$ は随分
小さい。どう 11 制限が働いてこうなるのか, はこのような
方法では今の所まだ判らな 11。

(1979 年早春. Do A.K.m.p!)

文献

- [1] Atiyah, M.F. & Ward, R.S. : Instantons and Algebraic Geometry. *Commun. Math. Phys.* 55, 117-124 (1977)
- [2] Maruyama, M. : On a family of algebraic vector bundles. *Akizuki Volume*. Kinokuniya, 95-146 (1973)
- [3] 村瀬元彦 : Classical Euclidean Yang-Mills 場に於ける Self-Duality の幾何学的意味について. *数理研講究録* 324. 64-96 (1978)
- [4] — : Yang-Mills 方程式の解の空間について. 城崎代数幾何 symposium, 1978年12月.
- [5] Jackiw, R., Kohl, C., & Rebbi, C. : Conformal properties of pseudoparticle configurations. *Phys. Review D.* 15, 1642-1646 (1977).